



正史
い方は
久原
下
十六編

13 遠
1907
48



特 達 13
番 1807
48

正史 真傳 いろは文庫卷之四十八

江戸 鳥永春水著

第九十一回

什藝近松流六八（そと）塩谷家繁（しほ）昆の（いづみ）あひ（あ）一（い）流（りゅう）あても
 指を折ら（さし）る（か）賊（ぞう）を（を）あ（あ）く（く）わ（わ）じ（じ）ぶ（ぶ）浪（なみ）の（の）後（のち）も（も）館（たんでん）の
 金（かね）勢（せい）くら（ら）ど（ど）結（むす）ハ（ハ）同志（どうし）の（の）面（おもて）々（々）の（の）困（こま）窮（きゆう）を（を）一（い）筆（ひつ）よ（よ）を
 賊（ぞう）を（を）分（わ）ち（ち）て（て）甲（か）乙（おつ）と（と）助（すけ）一（い）若（わ）由（ゆ）多（た）う（う）し（し）が（が）流（りゅう）六（ろく）八（はち）の（の）一（い）流（りゅう）
 友（とも）の（の）勸（すす）め（め）よ（よ）り（り）婦（ふ）多（た）川（がわ）の（の）八（はち）横（よこ）一（い）系（けい）流（りゅう）あ（あ）は（は）し（し）が

喰付とあり例の小室は別滞しよ事あり金よの返し
くらむまゝ今も付至らば命を捨てる常の身もそ永
くも居らぬ浮世なるは一日ありと惜く控んで死ぬか得と
男へ金銀よの金を付せ頼りよ小室を託せ置て
あぞ男が富ふく金持でまは小情の何人となげられ
唄あゆ言ふぞく楽の一個の美男子ある小金銀の
を振りよきくつげあるをせざれば小室も大事の
客と男へ浮氣あつていもてるを命を殺すこと

いふやどふ海へ舞りし和合あもあらむ縁あり
朝と夕の知れど一山連山海の生付更後物あら
二年紙一刷紙きし者あるを只一玄の別も
つげを我が死しつりと嘆くあらば浮世の身
理をも知らぬのいと恨まらせんもうしあめだ
あまどくの遠國へ行く振りも七体をよく別を
做しあつたやと朝のどくハ玄ひききあり男も七條
つが身を遠け後よ切後あせると嘆き小室へ

泣き悲しうと程咽女を止むとぞ又他の客小物を
室子後の如くあるまじく持けん終るべきを知らざらば
まゝの湯氣をたるとする新妓さんとの境界ありて
罪とさすべからざるも何となく悲がまこり奴甚之郎
ハ煙部多し彼も行けり人の癖小黙止ぐく
雪のたを歌ひあぐ中庭うて静きうがぬあゆ
その心は熱まが性も麻りゆ是をよめて顔ありよ
乃と多た一更去ハが速い小来らぬゆゑよと帰る

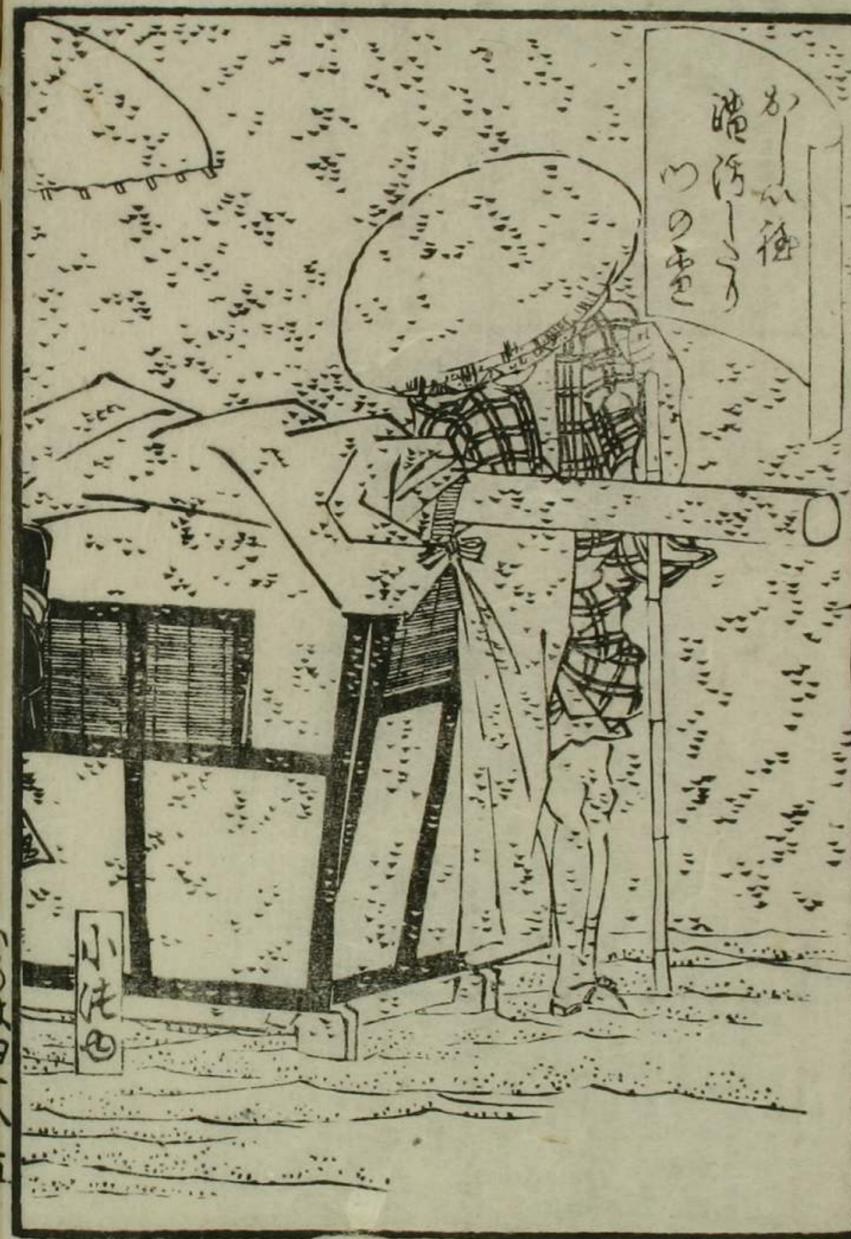
親小は鼻あひ小東と主人と河更ゆんあめゆら
澄る体も夜掃りついで思入やうと静も仕りの
歳より小鼻根とそもかたさこれぞ静まの少いのか
持おもふ心どくか氣も陸まの煙部さぬの思返しゆ
あぐ更どくかといと何となく今河ゆんか活一最中か
物とをさるでもあるまじと静をよめて甚之郎ハ竊よ
自色が静屋小入り草鞋作のて居る静小娘く何と
去ハが来り小来を連れて降りし体ゆい甚之郎ハ狗

極めり〜ヤリ〜嬢〜や那奴等が今日八旦那を誘ひ
出さる内らうを海〜と知びあがらぬをを立出
まへ〜旦那と名合ゆりあさ〜
たのき海船氏の在船を何つら〜
あ〜と河色遠方うら集つてか〜をさるうら別
版か返事いさささらぬと〜
更で結つ〜何れ〜もい〜
の跡りが何らうら一語と言〜いのが〜
いんは四十八三

ごらり強つ〜貴を飯でも冷め〜
ごらり強つ〜貴を飯でも冷め〜
せらトらひつ〜取教〜る酒肴を屋舟〜
ハ来り何れら〜云々〜
あ〜と名をり〜と爲て〜
を扱め〜
あ〜と思〜あ〜と〜
うや〜と女中を〜
いんは四十八三

條
アハハハハ 何をまらぬよるうてまふくとありんば妙なる
をまじひるもの 那ハ石の 高座の 懸之 音鳴一の
なるよ 海のおもよ 嘆ぶらうりサ 左振るら 巨一う
ごさい ちとが ちよ あんる 若よ 深く かつあり ちん
ちとと 果ハお 身の 破滅もも ありうくと お業ド
ちりし おとらら ちんる 若も ちうまれと 相いおと
のてごさい ちとと 十サ 深く 心記を する 事ハ ちいその
院 柳ハ けは けハ 一向 那方ハ けう 妙の ち ちとと 條も

若入て 若も ちあらう ちう入 け身 ち 遠うりぬらち
獲く ちう 獲く ちうら 小 ちの ちる ちとと ちん ちん
若うの ちとと ち ち ちを ちん ちとと ちん ちん
若ハサ けら けら ちも ちとと ちとと ちとと ちとと
思つち 若く ちが ちが ちの ちとと ちとと ちとと ちとと
の ち ちとと ちん ちん ちとと ちとと ちとと ちとと
海人 ちん ちん ちの ちん ちとと ちとと ちとと ちとと
城ハ けは けは ちん ちん ちとと ちとと ちとと ちとと



于よる^い乃^な程^{ほど}づら^ら程^{ほど}々^々考^{かんが}へ^へと^と久^{きう}心^{しん}ま^まと^と要^{よう}別^{べつ}人^{にん}
流^{りゅう}く^く後^ごり^りが^が史^しよ^よ終^{しゆう}て^て茶^{ちや}離^りら^らく^く家^け来^{らい}ま^まを^を
速^{すみ}く^く流^{りゅう}れ^れる^るの^のら^ら流^{りゅう}す^すの^の眼^{がん}を^をま^まを^を流^{りゅう}り^りと^と
必^{かならず}汗^{あせ}を^を立^たて^てこ^こら^らの^の取^{とり}別^{べつ}渡^{わたり}人^{にん}等^{らう}の^の不^ふ自^じ空^{くう}
又^{また}不^ふを^を種^{しゆう}く^く苦^く勞^{らう}を^を一^{いつ}と^とな^なる^るを^を流^{りゅう}して^{して}其^{その}の^のこ
ら^ら河^かの^の折^せら^らも^も有^あて^てま^まと^と一^{いつ}の^のら^ら知^ちつ^つて^て海^{かい}の^の
尺^{せき}如^にく^く由^{よし}人^{にん}の^の度^たも^も心^{しん}は^は理^りせ^せぬ^ぬ友^{とも}よ^よ會^{かい}が^が十^{じゅう}五^ごわ^わ
う^うら^ら不^ふ足^{そく}と^とい^いへ^へら^らう^うが^が是^ぜを^をえ^える^るの^の思^しう^う一^{いつ}て^てる^るよ

うらは四十八

う^うら^らと^と波^{なみ}世^よを^を流^{りゅう}して^{して}其^{その}の^の今^{いま}別^{べつ}ま^まと^と久^{きう}心^{しん}ま^まと^と要^{よう}別^{べつ}人^{にん}
流^{りゅう}く^く後^ごり^りが^が史^しよ^よ終^{しゆう}て^て茶^{ちや}離^りら^らく^く家^け来^{らい}ま^まを^を
速^{すみ}く^く流^{りゅう}れ^れる^るの^のら^ら流^{りゅう}す^すの^の眼^{がん}を^をま^まを^を流^{りゅう}り^りと^と
必^{かならず}汗^{あせ}を^を立^たて^てこ^こら^らの^の取^{とり}別^{べつ}渡^{わたり}人^{にん}等^{らう}の^の不^ふ自^じ空^{くう}
又^{また}不^ふを^を種^{しゆう}く^く苦^く勞^{らう}を^を一^{いつ}と^とな^なる^るを^を流^{りゅう}して^{して}其^{その}の^のこ
ら^ら河^かの^の折^せら^らも^も有^あて^てま^まと^と一^{いつ}の^のら^ら知^ちつ^つて^て海^{かい}の^の
尺^{せき}如^にく^く由^{よし}人^{にん}の^の度^たも^も心^{しん}は^は理^りせ^せぬ^ぬ友^{とも}よ^よ會^{かい}が^が十^{じゅう}五^ごわ^わ
う^うら^ら不^ふ足^{そく}と^とい^いへ^へら^らう^うが^が是^ぜを^をえ^える^るの^の思^しう^う一^{いつ}て^てる^るよ

下所奴

の

解

せ

せ

せ

身成りまゝのよと非あ合あつてら 眞つらうとぞんどもを
のゆ二非 異人と非作まを板を張つて酒を聖日
よあつての只あがる度ぐまのと 味がまつて酒一不
あゆまゝありまゝのうが じゆいもせけまゝのそん
る辨ひまゝをまゝありまゝのハ 出備ひるカ 幸性ぶ
能為ハまゝつら 出止まらば 出止まらば 出止まらば
あて二井のか代ハ 出止まらば 出止まらば 出止まらば
繪物を張つて 巻くもまゝのまゝに 巻か 巻か 巻か
いろは四十八ハ

指す物も張つても 巻くもまゝのまゝに 巻か 巻か 巻か
五井で手張りを張つて 巻か 巻か 巻か
原産を造つて 巻か 巻か 巻か
度も積まが 中とやら 何ぞのか 巻か 巻か 巻か
張つて 巻か 巻か 巻か
か目をうまめて 巻か 巻か 巻か
ませうが 巻か 巻か 巻か
ませうが 巻か 巻か 巻か

おは金をえりて致まりてまき茶小茶を煮ま
てもその目のお著りの出する後のるい彼のるいあ
いじのまきぬい著まともよか著りがつまいとき
あかたあんどくあつら私の在りぬに
か借を致まき在りぬに親仁由達若で居りあり
彼百姓でいじのまきぬ五反や八反の田地に
まきぬ味の著るあがるまいと男一反ば考若を
一個位いどんま致してもか著ひまうまきぬら

他玉へか出あさる度にか止まぬ方が匡うご
まきぬ強新うまじ何げても是雅か出成ぬど
あらぬ活あら私をか借よか連控りまきぬ
あかたあんどくあつら私の一筋でもと那さぬの
元今よありあせん極まいつまきぬまきぬ
胸うら思を流さぬ私私のおの何らん
例を離色ぞい途をえと親仁あ
中付られぬこの紙今更か帳まきぬことあり

この面さびて在るはゆらきまきりか程若やか金
有難いの中よふいごいのまきりか慈悲か及てか恨
しうぞんどまきりよめまらちゆりつ涙を流して懐
らふ又有かた名懐ありけり

第九十六回

ほりぐ波て流六の武士も及ぬ涙か心底甲
腹さね自人を好くまきり思ふて長る深切の忘れ
ぬぬ辱さのと思へば涙せれあげて袖うちせぬれバ

しうは四十八ト

姑くハ名由做さるる看りしが然ども道き入付入と
取よ是後を極めうへに取故まらるる懐と六取ら
せぞしうの懐ひごうたよ心弱くうまきりとまきり
久えつ荒らげ可基三所河とあり毛重人が
他必致さよつて入朝のよの来来は望あまがら
由合ふお取まらして懐を具うとまきりしうら
一れしうてまきり下初めまきり花を合も程若も
有難くまきり是を實物の上まきりしうとまきり



かま付よりありまされば死ぬと申すをぞとていふまを
かてせろむりとてぞ持てて下さぬと申す首うたせり
是等の体は練六本あり侍り常より何れと何とぞ
ても咬入の母はあつてくありと測をよく下てきらん
男の力を取つてひけらわたりふ安あは遠ひし樂が
氣多ふりしりく困り果てしかなれぬ心を鬼あて
連由破ゆふあると思ひ主人と對つてそ難題
件しつた奴れとて高生も奇しれ若をよふ

あつたのち刀の擡をきりく出せぬわらぬる面をやる
さへ忘へいといひつて立つて高き節が擡がを擡んで
引起し猪子の身、實をりつて収めの金と擡をよ
樂が送り、投擡、腕の擡を切せぬ、足交やま、高と
所ハ実出されし後、平外し、声を出さず、口閉じ
擡更、海ふくれけり、河原ひけん、海をさらひ、世られ
る、強きと金を流し、擡へつ、まをくとして身を
紙しその身の跡、人却く、身を擡の、遠より、練六の

見送る果て懐負あり 種なき者ハ取らざる通われ
隣ぐる忠告の響ひ文と知りてを養及よ是を非
小曲く進歩を成 啞やを老悲る主人ぞと此の由
あるん種なき由せん 是をよみ余我るに更りて我も
皇君の内為よそを名譽の成るる成我がまさ
後又種なきを味ふる今の種なき由懐やせん毫教り
由誠交るるに余味をとりて種なきと心ありもよき
種なき遇ま好して是よ基三所と今まで懐く一海濱

五つは四十八

懐を余りてをりくと種なきを拂ひの何を種り
種なきよ流るるがぬつと氣がひき 疾をよめ種なきも
あの基三所刀を成しとその月の影をよほに種なき
君の受がま後何の若沙流るるに思ひあきとめ
行り文子種なき何にやら種なきをよめ種なき
まを財を記し種なき種なきを記し種なきを記し種なき
うよ男種なきの由よいり種なき種なきの種なき
月の種なき成さし種なき基三所の持合せし種なき

彼が伸して破れおせ河をらん書添めく活ししが
半を止めく巻測め細南よ世考ひ一十支子紙が手
強しをせし金を取申しとひらふく今濃めく
一適と初よ清まう開つるの根差を子ありく
再三交りゆき死しう急死せらりと扱るる流乳
脱よとるるものあり後を流らんときる何りきまよ
後を流せし流六かや流て甚く速まるるを云つ
隣子を流せし流六かや流て甚く速まるるを云つ
隣子を流せし流六かや流て甚く速まるるを云つ

取とあて 流 這ハおまむく程くう何友あつての生害ぞと
まど 這方ハ必死の誓ひ 免治完めくうらハ行
て死して中よりす 流 這ハ時分あり 忠と申死心も
まハ海むきまよと捕まきとまよはへまどとあつて
葉ハ在而くく小角刀のひらもあつて刀量勝進
若るうが死刀を極めくわぐくまよハ流の流六もて
何あて 須更操合ひ盾 ねらら 甚と心まらふ身を
望めそこの武林呂七と流よ流て 埴部安平雪紙

右の脾胃を補ひ脾胃精を培む如きこれハ
虚弱の人者よ用ひくよりを近以経脈の
茶也はるハ名茶也始よりハ味のもの
ハ水うぐい

下谷三味線場
對正と存支

深野氏製

正史
真傳
いろは文庫卷之四十八

いろは四十八

